

【第二十三回「全国高校生読書体験記コンクール」中央入賞者一覧】

- 一、文部科学大臣奨励賞
北海道札幌南高等学校一年
- 二、全国高等学校長協会賞
岐阜県立岐阜北高等学校一年
- 三、全国高等学校長協会賞
高知県立高知農業高等学校三年
(体験書籍『「ごつくくん馬路村」の村おこし ちっちゃな村のおっきな感動物語』大歳昌彦著)
マックローリー 花 ナンシー 馬路村から学ぶこと
- 四、一ツ橋文芸教育振興会賞
岩手県立不来方高等学校二年
(体験書籍『アンの青春』L・M・モンゴメリ著 松本侑子訳)
太田古都 バーリントンのアン
- 五、一ツ橋文芸教育振興会賞
福島県立盲学校高等部普通科二年
(体験書籍『富士山を汚すのは誰か——清掃登山と環境問題』野口健著)
緑川秀太 富士山を汚すのは誰か
- 六、一ツ橋文芸教育振興会賞
群馬県立前橋女子高等学校三年
吉川綾乃 何のために学ぶのか
(体験書籍『君たちは何のために学ぶのか』榎原英資著)
- 七、一ツ橋文芸教育振興会賞
神奈川県立光陵高等学校三年
武藤春香 成長する庭
(体験書籍『裏庭』梨木香歩著)
- 八、一ツ橋文芸教育振興会賞
熊本県 九州学院高等学校二年
徳永彩葉 マイタイム・ブレス・イン・デイス・モーメント
(体験書籍『ミュージック・ブレス・ユー!!』津村記久子著)

第三十三回全国高校生読書体験記コンクール

【文部科学大臣奨励賞】

非存在的存在への希求

北海道札幌南高等学校 一年

佐藤 咲良

山岳部に入部して3ヶ月になる。一番よく訊かれる質問は「山に登っている間、何を考えているの」というものだ。最初に登ったときは「疲れた」としか考えられなかった。せいぜい他には「いつ休憩になるのか」とか、「なんで山に登っているんだろう」なんてことぐらいだった。

そんな状態だったから、どんな山に登っても、楽しかったとかきれいだったという思いは一切ない。思い出しても坂道の様子がぼんやり浮かぶだけだった。それでも疲れている状態で登っていると辛いだけだ。そこで、積極的にトレーニングを行った。その結果、余裕が生まれ、今まで見えなかった高山植物や沢や尾根等の眺望が少しずつ見えてきた。

でもつまらなかった。植物を見たってそれが何だろう。眺望がいくらきれいでも30秒も見ていたら飽きる。登山の醍醐味や魅力がわかり始めたのは登山大会の口頭テストの為に植物の名前や山の名前を覚えたところからだ。「黄色い花」が「エゾノリ

ユウキンカ」に、「平たい山」が「無意根山」に変わったときから面白くなった。そこで、見つけた花を覚えていて、帰ってから『新版 北海道の花』で調べてみた。花の名前がわかったときはうれし、次にその花を見つけたときは楽しくなる。先輩が山に登ると皆いつもより陽気になる理由を、私は実感していた。

しかし、なぜ名前がわかるというだけで楽しいのだろう。「黄色い花」だろうと「エゾノリユウキンカ」だろうと花自体が変化したわけではないのに。名前なんてどこかの誰かがつけただけのものではない。名前がわかるだけでなぜこんなに楽しいのか。花に限らない。「名前」とは不思議なものだ。勝手に人間がつけるものなのに、「名前」がなければ山も花も大きな総体の一部になってしまい、存在することができない。花も尾根も何もない、ただの道を歩いていたら、何も思い出がないのは当然だ。

だとしたら私は今までどれほどの存在を無視して生きてきたのだろう。私は名前を覚えることが苦手だ。植物も、クラスメイトもほとんど覚えていない。私にとつてそれらはただの背景だ。しかし背景があっても主役がいらない。私は漠然と世界を眺め、眼を留めることもなく流している。私の世界は「私」といくつかの「人」、そして大きな「背景」しか存在していない、ひどく貧しいものなのではないだろうか。

「名前をつける（覚える）」ということは「区別する」ということだ。「花」という大きな総体から「エゾノリュウキンカ」と名づけることで、自分の意識の中に「エゾノリュウキンカ」が誕生し、存在し始める。名前を覚えることで楽しくなるのは、そのことにより自分がその植物を「誕生させた」と錯覚するからではないか。山に登りその花を見るたびに親しみと愛しさを覚えるのは、親が我が子を愛することと同じではないか。外国に滞在中、母国のものに出会おうと安心するのは、それらが自分の中に存在するからではないのだろうか。知らない自分の中に存在していない無定形の世界の中で存在しているものに出会うことは溺れている最中に丸太につかまることができたような安心を得ることだろう。

だが、私は「世界」をつくる作業を怠っていたのかもしれない。道を歩いていても、私の「世界」には何もないのに、他の人の「世界」には興味深いものや珍しいもの、見ることで幸せになれるものがあるのではないだろうか。それはすごく悔しい。何も知らずに死んでいくのはもったいない。まず、「名前」を覚えていこう。その後に、勉強して「世界」をつくっていかう。そう思っていたけれど、間違っていた。「名前」は思っていた以上に深く、「世界」と繋がっていた。例えば「エゾノリュウキンカ」は「蝦夷立金花」で、黄色くて茎が立っている花。「ヤチブキ（谷地薔）」ともいい、谷地に多く生え、薔に似

ている。本当に谷地で黄色いエゾノリュウキンカを見つけたときの感動を今でも思い出せる。「名前」の通りに「世界」がつくられている。「名前」はただの記号ではなくて、「世界」の様相を表している「世界」の一部なのだ。

私達は、存在に出会おうとまず「名前」を知る。「名前」を通して「世界」を自分の中に取り込んでいく。「勉強する」ということは「名前」を知り、その背後にある「世界」を知るということだ。「名前」の形而上の意味に気づき、「名前」の暗記ではない「勉強」を体験すると、植物に限らずに英単語、世界史等も今までと違って見えてきた。それら全ては「名前」を通して深いところで繋がっているのだ。繋がりを見つけるたび、私の「世界」は広く深く、色鮮やかになっていく。私はまだ「世界」をつくっている途中だ。完成するときに来るとは思えない。けれど出来るだけ豊かな「世界」を持ちたいと思う。

この本はその為の「創造の書」の一つだ。

体験書籍

『新版 北海道の花』 鮫島惇一郎、辻井達一、梅沢俊著

第三十三回全国高校生読書体験記コンクール

【全国高等学校長協会賞】

「家族」とともに歩む道

岐阜県立岐阜北高等学校一年

菱刈 智也

「家族」って何だろう。

僕は、『とんび』を読んで、今、この問いと向き合っている。きつと今までも僕の心のどこかに存在していた問いだったのかもしれないが、知らず知らずのうちにふたをしてしまった。考えないようにしてきたのだと思う。

僕には父がいない。物心がついた頃には、祖母の家に住んでいた。だから父の顔を知らない。なぜ父がいないのかは、母から聞かされていないし、自分から聞くこともできない。

僕の母は、毎日懸命に働いてくれている。そして祖母は、毎日あたり前のように家事をしてくれている。

『とんび』は、妻を亡くし、不器用ながらも子どもを育てていく父親ヤスさんと、ヤスさんの周りの人達の温かい愛によって成長してゆく息子アキラの物語である。

幼いアキラが保育園で悲しい思いをした時、真冬の海でアキラに語る海雲和尚の言葉が僕の心に響く。

「アキラ、おまえはお母ちゃんがおらん。ほいでも、背中が寒うてかなわんときは、こげんして、みんなで温めてやる。」

「おまえにはお母ちゃんがおらん代わりに、背中を温めてくれる者がぎょうさんおるんじや、それを忘れるなや」

僕もアキラのように悲しい思いを何度も味わった。小学校の親子参観の日、「こんな行事、なくなってしまうばい。」と思いつながら朝家を出る。ランドセルがずっしり重かった。友達の間には親がいてにこにこ笑ってくれているのに、僕の横には誰もいないのだ。それが悲しくて寂しくて教室から逃げ出したかった。少年野球をしていた頃は「お父さんがほしい。」と強く思った事が何度もあった。しかし、それは必死に生きている母に言える言葉ではないことを僕なりにわかっていた。

そんな思いを抱きながらも母に対しての恨みは一切なかったのはなぜだろう。それは、母が自分のために頑張って働いてくれていることを知っていたからだ。それだけではない。自分にもアキラと同じように僕を支えてくれる人達がたくさんいたのだ。僕を可愛がってくれるおじさんとおばさん。いつも一緒に遊ぶいとこたち。僕の誕生日には、毎年必ずおじさん一家が来て祝ってくれる。会う度に「ともくん！」と声をかけてくれる近所の人達、学校の先生や友達、野球のコーチや仲間達。だから父のいない生活でも、普段は決して寂しくはなかったし、毎日が楽しかった。「僕にも背中を温めてくれる人達がぎょうさ

んおったんや。だから今の僕があるんや。それは、本当に幸せで尊いことなんや。」と思う。僕の背中に重ねられたたくさん手のぬくもりは、「家族」の温かさなのだと、海雲和尚の言葉に気づかされた。母の懸命さ、祖母の支え、そして「家族」と同じたぐさんの温かさがあつたから、僕は母に恨みをもつことなどなかったのだろう。

物語では、ヤスさんとアキラを見守り支えているたえ子さんの存在も大きい。そんなたえ子さんにもつらい過去があつた。生き別れた娘泰子さんと再会した時、親子の名乗りもせず、さり気なくたえ子さんは言う。

「今日が一番大事、その次に大事なのが明日、それからあさつて……昨日やおとついは、もう、振り返らんの」

僕は父の記憶がひとつもない。父について一切聞いていない。けれども僕はもう母にこのことを聞かないことに決めている。「秘すれば、花」なのかもしれない。僕はたえ子さんの言葉に深くうなずいた。今、僕は、充実した高校生活を、精一杯生きている。過去を知っても今更、何も変わらないと思う。ただ、もし、父が生きているのなら、僕を誕生させてくれたこと、僕を短い間でも育ててくれたことに、ありがとうございますと伝えたい。僕が父の「家族」であることに変わりはないのだから。

僕は今春、高校生となり、将来の道を考え始めている。夢に向かうために、進学や就職で家を離れるかもしれない。母を取

り残していくかと思うと胸が痛む。僕のことをいつも一番に応援してくれる母は、何も言わず送り出してくれるだろう。ヤスさんは言った。

「大事に思うとる者同士が一緒におつたら、それが家族なんじゃ、一緒におらんでも家族なんじゃ。自分の命に替えても守っちゃる思うとる相手は、みんな、家族じゃ。」

僕がこれからどんな道を歩むにせよ、僕には「家族」がいる。僕の背中を温めてくれた人達に感謝し、母が誇れるような人間になろう。僕自身が、だれかの背中に寒い時、温めてあげられる人になろう。そしていつか僕自身が「家族」を作っていくのだ。母は空高く飛ぶとんびのように見守ってくれるだろう。

「家族」って何だろう。

この夏、一冊の本が僕の背中を押した。
新たな一歩が踏み出せた気がしている。

体験書籍

『とんび』重松清著

第三十三回全国高校生読書体験記コンクール

【全国高等学校長協会賞】

うまじむら

馬路村から学ぶこと

高知県立高知農業高等学校 三年

マックローリー 花 ナンシー

地域活性化、村おこしの成功例として、馬路村の話をよく聞く。高校に入学してから、部活動として地元商店街の活性化に取り組んできたため、馬路村について興味があつた。夏休み前に、馬路村の村おこしについてまとめた本があると知り、読んでみることにした。

『「ごめん馬路村」の村おこし』は、土佐弁の会話もたくさん盛り込まれていて、非常になじみやすく、読んでいておもしろかった。同時に、私達の行ってきた活動と重ね合わせて共感できるところや、違うところを発見した。馬路村の村おこしは成功したが、私達の取り組んだ商店街の活性化、まちおこしはまだ成功したとは言えない状態だ。馬路村の村おこしとの違いから、商店街の活性化のヒントが得られるのではないかと感じた。

私達が活性化に取り組んだ「ごめん町商店街」は、多くの店がシャッターを閉じてしまっている、まさにシャッター商店街

だ。人通りも少なく、どことなく暗い雰囲気が漂っている。後免町はアンパンマンの作者であるやなせたかし氏が幼少時代を過ごした町であり、商店街にはアンパンマンキャラクターの石像が並んでいる。私達は、初めにそれらを活用したイベントができないだろうか考えた。そして、アンパンマンの衣装コンテストや、商店街をアンパンマンキャラクターでいっぱいにして、それを探したりクイズに答えたりする「アンパンマンをさがせ!!ロード」などを企画し、実行した。子ども達がたくさん集まり、喜んでくれた。普段にはない賑わいが町に戻り、イベントを成功させることができた。子どもが参加するイベントを開催すると、大人も集まることから、その後も、手作りのろうそくを商店街に灯す「キャンドルナイト」など、子ども達が参加できるイベントを毎年行ってきた。このイベントは今年で三年目になる。

商店街活性化の取り組みの中でも、最も力を入れた活動は、お野菜戦士「べじたぶるふぁーむ」だ。これは、「ごめん町商店街」のヒーロー「ゴメンジャー」からヒントを得て私達が結成した、商店街の平和を守るヒロイン戦隊だ。メンバー五人は全員高知農業高校畜産クラブの部員で、商店街や地域のお祭りなどで野菜の魅力を伝える歌や踊りを披露している。子どもから大人まで、特に女の子に人気で、参加するたびに人だかりができ、記念撮影をせがまれている。このように、私達は主にイ

ベント活動を企画し、実行することで商店街に人を呼び、活性化に努めてきた。しかし、イベントの時には人が集まったものの、その後は元の静かな商店街に戻ってしまう。

一方、馬路村は、村の面積の96%が森林で、村の産業は柚子しかない。その柚子も、高齢者の農家が多く、人手が足りないため手間がかけられず、表面のでこぼこした見た目の悪いものが多かった。そのため、付加価値を付ける取り組みを行った。生産・加工・販売を一貫して行う第六次産業を行ったのである。ユニークなCMや、イメージキャラクターの好評もあり、村おこしの成功に結びついた。

馬路村の村おこしと、『ごめん町商店街』のまちおこしの違いは「目標・雇用・かけた時間」この三つだと私は思った。私は『ごめん町商店街』をイベントで活性化しようとしたが、地域住民や商店街の方々が求めているものとは違っていたのではないかと思うようになった。活性化のためには、イベントの時だけ人が集まるのではなく、地域で暮らす人々のニーズに応え、固定客やリピーターを増やす努力をしなければならないのだと気づいた。活性化の「目標」が明確でなかったのだ。実際、馬路村は一度村を訪れたお客さんを手放さない努力をたくさん行っている。馬路村からお客さんに年賀状や暑中見舞いも届くらしい。

雇用については、馬路村は農協での雇用が増えたことで、村

で働く若者が増え、活性化の大きな力となっている。村おこし、まちおこしに必要な、多様な年代の新しい意見や若い力を得ることができたことは大きいと思う。

最後に時間をかけることの重要性である。私達の先輩が始めた商店街活性化の取り組みは今年で四年目だ。馬路村は、もつと多くの時間をかけて、信頼や人と人との絆を結んできた。その間には私達も体験した、思うようにいかないもどかしさや辛さもたくさん経験している。それに負けず、諦めなかったからこそ村おこしに成功したのだと思う。村おこしやまちおこしとは、本来、とても時間のかかるものだと思う。『ごめん町商店街』も信頼や絆を大切にして、まちおこしを継続していかねればならないと思う。嬉しい進展もあった。私たちの活動をきっかけに町が動いてくれた。銀行だった建物を改装し、地域住民や私達が活用できる広場を開設してくれたのだ。

私は、自分の体験やこの本を読んだことで、卒業後も地域活性化に関わりたいたいと考えるようになった。大学で地域経済など専門知識を学び、さらに目標を明確にした上で時間をかけ地元を元気にしていきたいと考えている。

体験書籍

『「ごっくん馬路村」の村おこし

ちっちゃな村のおっきな感動物語』大歳昌彦著

第三十三回全国高校生読書体験記コンクール

【一ツ橋文芸教育振興会賞】

バーリントンのアン

岩手県立不来方高等学校二年

太田 古都

この夏、私はバーリントンのアンだった。赤毛のアン——一言で説明すると、そばかすの女の子が全く知らない土地へ行き、そこで全く知らない人と生活し、成長するという話だ。私はこの夏休み、ホームステイプログラムに参加し三週間のうち十一日間をアメリカのバーリントンで過ごした。ホストファミリーのメリーと過ごした十一日間、私はまぎれもなくアンだった。

今思い返せばアメリカでの生活は、始まりからして赤毛のアンと酷似していた。私は重度の猫アレルギーであると事前に国際交流団体の方へ報告していた。しかし、猫のいるファミリーを紹介され、慌てて変更を希望したが出発の前日まで私のファミリーは未定だった。やっと決まったと報告されファミリー情報をどきどきしながら見た……のだが、その内容が、

「元、軍隊で働いていました。一人家族、五十歳、趣味はランニングです。」

添付されていた写真に笑顔はなく、私は怖くなった。今となればどうということはないのだが、ファミリーがギリギリまで決まらず不安だったところに、軍隊・ランニングという言葉がぐるぐると頭を巡り不安が募った。マリラも男の子を貰うつもりだったところに手違いでアンが貰われてきたので一騒動あったわけだが、どちらにも共通して言えることは、この手違いが最高の出会いをもたらしたということだ。アンと私、マリラとメリーは似ていると思う。本の中に出てくるアンの考え方や行動が重なって仕方がない。例えばアンも私も料理や裁縫といった家事にあまり熱意を持っていない。料理に至っては事件を起こすほどで、アンはレイヤーケーキに誤って痛み止めの塗り薬を入れてお客様にお出しした。一方、私のケーキは膨らみもしなかったため、失敗を隠蔽しようとしたが見つかった。もちろん、二人ともこっぴどく叱られたであろうことは容易に想像がつく。共通点が多すぎるため、アンがマリラに叱られていると自分が叱られているように感じてしまう。マリラとメリーの大きな違いはマリラは時に辛辣なところもあり、そこが彼女の優しさを際立てるのだが、メリーはその辛辣さを丸ごと取ったような本当に温厚な人柄であることだ。

バーリントンでの生活が始まり二、三日も経たないうちに私は小さな事件に巻き込まれた。ある日理由もよくわからず班員の女子達から仲間外れにされたのだ。どうしてアメリカまで来

て日本の女子は集団を作るのだらうとただ恐ろしく涙が出そうになった。帰りに迎えに来たメリーに思い切って打ち明けてみると、アメリカの若者も時に集団を作ることやカモと水の話、話の方向性が変わり第二次性徴の話になり最後には大声で「I don't care」と大声で歌いながら帰ったため家に着く頃には何を悩んでいたか忘れてしまった。メリーの優しさに心から感謝し、その時初めて涙が出た。アンが人間関係で悩んでいた時に、

「どうしても気になるの。みんなに好かれたいもの。一人でも好いてくれないと悲しいの。」

とマリラにアンが泣きついた際マリラが、

「ちつとも気にすることはないよ。今日は終わり、明日はまだ何の失敗もしていない新しい一日がやってくる」

と言っていたのを思い出し、このマリラの答えにどこかメリーが私にしてくれたことと通じる所があるなど感じた。

古都という私の名前は発音が難しいのかメリーは私をコートウと呼んでいた。ある日、日本語の名前には意味、由来があるのかと尋ねられた。私は、自分の名前は古都・京都と同様な古い寺や歴史のある場所を示す珍しい名前なため誇りを持っていると伝えた。するとメリーはにっこりと笑って、

「美しくて素敵、誇りよね。」

と誉めてくれた。少し前まで私は自分の名前が好きではなか

った。アンも自分の名前に不満を持っていた。しかしながら本の中の、ダイアナの、

「名前って、持ち主の人がら次第で、美しくもなれば醜くもなるのね。」

との言葉に共感する。私の古都という名前は日本という美しい国を象徴している。アンと同様に私も、名前が人をどうこうするのではない、人が名前の価値を決めるのだと気づいた。だから美しい生き方で一生に一つの名前と自分を輝かせたいと思う。

誰もが心の中に支えとなる人や考えを持って生きている。私の心の中には赤毛のアンの世界がある。そしてバーリントンのメリーとの思い出があり、私の弱気な背中を押してくれる。諦めかけていた夢、今なら胸を張って言える。アンの育った島のプリンスエドワードアイランド大学へ進学し、アンの叶えた夢を私も叶えたい。そこで私は本物のアンに出会ふのだ。

体験書籍

『アンの青春』L・M・モンゴメリ著

松本侑子訳

第三十三回全国高校生読書体験記コンクール

【一ツ橋文芸教育振興会賞】

富士山を汚すのは誰か

福島県立盲学校高等部普通科二年

緑川 秀太

今、世界遺産に登録されて注目の、日本一高い山、富士山。

この富士山は、様々なガイドブックを見ると、雪をかぶった幻想的な姿や、湖に映った逆さ富士が載っています。

私は、さぞかし富士山の山道も幻想的なだろうと思っていました。

そんなある時、母から一冊の本を渡されました。『富士山を汚すのは誰か』という、アルピニスト野口健さんの本でした。私の中にある富士山は幻想的なものだったので、何が汚ないのだろうと思ひ、興味を持ち読み始めました。結論から言うと、富士山はゴミの山で、汚しているのは我々登山者ということでした。特に、当たり前ですが、日本人の登山者が多くゴミを捨てているのでした。

富士山は日本にあるのだから当然日本人じゃないのか？とこの本の内容に疑問を覚えました。

しかし、その疑問自体が富士山を汚している原因なのだと野

口さんは言っていました。

まず、ゴミを捨てるという感覚が間違っていたのです。町中でゴミをポイ捨てしてはいけないように、山も、富士山に限らずポイ捨てをしてはいけないのです。私は本を読んでいる内になんとか恥ずかしくなってきた、心を改めようと考え直しました。それからというもの、富士山にはゴミが多いというニュースを耳にすることが多くなりました。

高校一年の夏、東北の被災地の高校生を対象としたイベントに参加しました。福島県三春町出身の登山家・田部井淳子さんの企画でした。あの本を読んだから、一度はこの目でゴミの様子を確かめたいと思ってはいましたが、最初は嫌でした。

なぜなら、他の人に迷惑をかけないか、視野が狭い私は、無事、富士山の険しい道を登れるか、視覚障がい者の私が、健常者の高校生の中に混ざっていたら、変に思われないかという不安があったからです。

オリエンテーションでスタッフの中に視覚障がい者の登山をサポートしてくださる方がいると知り、「安全に登れるんだ」と安心できました。もう一つの不安は六十人もいる参加者の中でうまくやっていけるのかということでした。しかし、大きな不安を抱いて準備をしていた私にとある男子達が、

「いっしょにトランプやろうぜ」

と誘ってくれたのです。学校のことなど他愛のない話をして

いる内に、不安を抱えていた自分がバカらしく思えて来て、笑いが止まりませんでした。

ご来光を見るために、朝早く起きて、登り始めたのですが……

あいにくの雨でした。岩場では、足元は見えても、視野が狭いので、次に足をどこにかけたらよいのかという展開が読めず、ふらついたり、転んだりしました。

「この先段差」とか「頭の上気をつけて」と教えてもらっても、ぶついたり、転んだりしました。雨は続き、険しい山道を登っても登っても、景色はずっと雲に覆われ、真っ白でした。結局、頂上まで登っても周りの景色が変わらず、雲の中を泳いだようでした。本当に自分は、富士山に登頂したのかと、一緒に登った男子とスタッフの方と笑い合うしかありませんでした。

下りる時は下を見ながら歩くのですが、足元が急で、何度も転びました。雨で滑りやすくて神経をすり減らしました。見逃せないゴミ問題は登ってみて実感しました。七合目辺りから、ゴミが増え始め、山小屋の後ろや立ち入り禁止区域のところには地面を覆いつくすほどのゴミがありました。

世界遺産に登録され、入山料をとったとしても、たくさんのゴミが出ることでしょう。しかしそのゴミを捨てずに持ち帰ったり、ゴミ拾いしながら登ったりすれば、富士山はきつときれいになると思いますし、世界文化遺産に登録されてからこそが

環境保全に対する厳しい姿勢が求められ続けます。

それからの私は中学一年生以来出場しなかったピアノのコンクールに向けて練習を開始し、三月に発表会に出ました。野口健さんの著書『あきらめないこと、それが冒険だ』も読みました。部活動もかけ持ちし、生徒会書記になりました。また、陸上競技も、走り幅跳びと百メートル走で全国障害者スポーツ大会に出場します。

そして今年はこれから生徒会長に立候補しようと思います。障がいがあるからといって、自分の世界だけにとらわれず、もっと広い視野で周りを見てみるのが大切だなと感じています。たとえiPS細胞による網膜の再生よりも、私の眼が光を失う方が早くとも、何にでも挑戦し、人生の山坂を踏破してみせます。

そして富士山は勿論、福島美しい山並みを、肥沃な大地を、清らかな空気を、おいしい水を、未来へ残せる大人を目指します。

体験書籍

『富士山を汚すのは誰か——清掃登山と環境問題』野口健著

第三十三回全国高校生読書体験記コンクール

【一ツ橋文芸教育振興会賞】

何のために学ぶのか

群馬県立前橋女子高等学校 三年

吉川 綾乃

私は今、高校三年生として将来を考え、日々、前に進んでいる。大学受験を冬に控え、毎週のように実施される模擬試験の結果に一喜一憂し、友達と切磋琢磨しながら、それぞれの目標に向かって、高校生活最後の時を過ごしている。とにかく一心不乱に勉強すべきなのに、難問にぶつかると、「こんなに難しい問題、生きていく上で解ける必要があるのだろうか。」「これほど沢山の知識を何故覚えなくてはいけないのか。」と余計なことを考えてしまう。「そもそも、私はなぜ勉強するのだろうか。」と考えることで、時間が過ぎてしまうこともあった。そんな中、本棚にあった『君たちは何のために学ぶのか』を何気なく手に取った。最初に読んだのは、高校一年生のときだった。文章は平易であったが、中学を終えたばかりの私には、まだ「将来」は遠いものを感じられ、理解したとは言い難かった。進路を強く意識した今だからこそ、自分が何のために勉強しているのかを明確にして、目標に向かう原動力にしたいと思う、

再び本を開いた。

著者の榎原さんは、金融・経済の世界で活躍してこれたご自身の経験から、変化する現代社会に求められるのは、ゼネラリストよりもスペシャリストだと述べている。そして、日本人として世界に通用するスペシャリストになるために身に付けるべき力として、創造力、自分を知り強みを生かす力、コミュニケーション力を挙げている。スペシャリストというと、私は、一つの分野に特化した専門知識やスキルを持ち、ただ黙々とその仕事に打ち込む、一匹狼のような人をイメージしていた。しかし、真のスペシャリストとは、その人ならではの仕事的能力を持った上で、他人ときちんと会話をしながら仕事のできる人なのだという。そのためには、他のスペシャリストと共通の土台を持つことが不可欠で、その土台となるのが基礎教養なのだ。土台はしっかりと大きい方がよいし、どんな勉強も土台の一片となり、大きな土台は多くの可能性につながる。学校で勉強している自分が、人生の土台づくりをしている姿に重なった。

「創造力とは知識の掛け合わせ」。私はこの言葉に出会って、心の目が開いたように感じられた。私が今、何のために勉強をしているのか、明確に表現されているからだ。創造力は、知識の掛け合わせにより、無限に増えていく。自分の持っている知識を何と掛け合わせるか、誰の知識と掛け合わせるか。その組

み合わせは無限で、創造力は際限なく大きくなっていく。

自分の高校生活を振り返って、「あれは知識の掛け合わせのおかげだったのか」と感じることもある。私は今年の六月まで、生徒会本部役員として生徒会活動に携わっていた。生徒から寄せられる様々な意見を基に、よりよい学校生活が送れるように改善策を話し合う会議の一つに「評議会」というものがある。この会議では、各クラスの代表や生徒会本部役員のほかに、委員会の委員長や、運動部・文化部の部長と一緒に、一つの議題について話し合う。多くの視点から幅広い意見がでて、私には思いつかなかったような問題点や改善策がたくさん生まれた。それはまるで、化学反応を見ているようだった。今思えば、この会議で、全体を統括する生徒会本部が持っている知識と、委員会や部活動をしている生徒の知識が掛け合わせられ、新しい秩序とより心地よい学校生活が生み出されていたのだ。

このような化学反応を一人の人間の中でもたくさん起こすために、知識を増やせと、榊原さんは述べているのだ。外国語や古典、世界史、地理、数学などを学ぶのは、受験勉強のためではない。人生の土台となって、将来、他のスペシャリストと対話しながら、社会の中で新しい化学反応を起こす力になるのだと、私は理解した。

人間は万能ではない。たとえ、どんなに優秀な人でも、一人の人間にできることは限られている。だからこそ、自分の強み

に気づき、弱みから目をそらさず、他の人との違いを認め、補い合い、高め合うことで、想像を超えるすばらしい展開に出会うことができるのだろう。同様なことは、国についてもいえると思う。世界が多様な言語、人種、文化の国々で成り立っているからこそ、様々な問題を抱えながらも、知識を掛け合わせることで、発展させていくことができると私は信じる。

「何のために学ぶのか」。高校生活も最終コーナーに差しかかり、周囲の雰囲気も一変した。しかし、この本を読んで、先の見えなかった受験勉強の向こうに光が見えてきたように感じる。榊原さんは、若者に「飛び出せ」「とんがれ」とメッセージを送っている。私は今、飛び出す力を蓄えているときなのだ。そう自分に言い聞かせて前を向き、彼の言葉に背中を押されるように、また走り始める。

体験書籍

『君たちは何のために学ぶのか』榊原英資著

第三十三回全国高校生読書体験記コンクール
【一ツ橋文芸教育振興会賞】

成長する庭

神奈川県立光陵高等学校三年

武藤 春香

それまではただなんとなく生きていたのだ、あの赤い字を見るまでは。その時から、何か得体のしれない「恐怖」が私を暫し立ち止まらせた。生きていることも、死ぬことも恐かった。けれど時が経ち、死を受け入れてこそ初めて生が見えてくると気づいた。そんな青春に寄り添い続けた本がこの『裏庭』である。

私はあまり小説を濫読しない。評論は手当たりしだい読むのだが、小説はどうもたくさん読めない。一週間くらいはその本にかじりつかなければ読んだ気にならない。折にふれて読み直したいからなかなか売ることできない。『裏庭』もそうだ。小学六年の時に始めて読んだ後、現在まで何度も何度も読んできた。おかげで折れていたり切れていたりしている。「大好きな」というよりも、「離せない」のほうに近い愛読書である。

始めて読んだとき、私は学校に足が向かなくなっていたころだった。今考えてみるとささいな理由だったと思う。みんなと

同じように考えて行動するのが馬鹿らしく思えたのに浮いた存在になるのは耐えられなかった。だから、主人公に自分を重ねて彼女のように成長したいと願った。彼女の両親に自分を苦しめるものたちを当てはめた。しかしどうしても分からないところがあった。何故彼女は自分を苦しめたものに仕返しをせずに晴れ晴れと裏庭から出てこられたのだろうか。

そしてこの本を本当の意味で愛し始めたのは中学時のある事件後であった。今となっては他人に話すこともできるが、中学の頃はその事件がずっとまとわりついて人間不信に陥った。友人に裏切られたのだ。私はあの赤い字で書かれた手紙を一生忘れられないだろう。不登校の私を救ってくれた友人に裏切られる。それは私をニヒリズムに引きずり込むのに十分すぎる出来事だった。「気持ち悪い」か。「頭が良いのがむかつく」か。ああ、人間なんてこんなものだ。全てがうっとうしくて、邪魔だった。人の役に立ったところで、それは大したことだろうか。どうせ皆死ぬ。その頃の私は、生も死もただ傍観するだけだった。あれだけ嫌った、彼女の両親のように。

現在はその頃の自分を知ったかぶりと笑ってしまう。ただ逃げたかっただけだろ、お前。それを正当化しかっただけだろ、私。欲しかったのは私自身だ。「なりたいたいの、私しかない」というセリフに傍線が引かれていた。いつ引いたかは覚えていない。けれど、過去の私は無意識に知っていたのだ、自

分が本当に欲しいもの。自分が認めた自分。寄せ集めの情報に左右されない自分。気持ち悪いほどに自分染みていて、でもどこか清々しい存在。照美は化け物とタムという可愛らしい少年に通じるものを見出した。それは明記されずにいるが、いわば光と影なのだろう。影とはつまり、自分が直視したくないところだ。そこをはっきりと認識しなければ光だって見えてこない。過去の私はそれが怖かったのだ。

この本を読みなおすたびに感じるのは、自分の内面がどれだけ変わっていったかという手ごたえだ。裏庭から帰る時、彼女は一体いくつのものを失いそして得たのだろうか。人を殺すほどの怒りも、友人との別れも。この物語は生も死も扱う。そのことが私にある考えを奮いおこさせる。裏庭は、その人そのものだ。

小説の中に正解はない。正解を書くのが小説ではない。何が正しいかを決めるのは読者自身であるからだ。それに気づいたのがこの物語だった。照美は彼女の真理を見つけたのだ。私も目を閉じて考えてみよう。彼女の両親だけが悪かったのか？それは何処かで習ったことを適用しただけではないだろうか。そう、正しさを正しきたらしめているのは己だ。自分で自分を作り上げている。けれど私たちの目は己を映せない。少なからず自然のままでは。だから周りに影響される。そしていつの間にか他人に依存しなければ己を見いだせなくなる。誰かのため

に生きなければと己を我慢する。それに疲れ苦しんだ主人公。しかし彼女は裏庭から帰ったとき、他人の影から解放された。母親と自分は全く別個の人間だと、母親の役に立つ必要は必ずしもないと気付いたのだ。

思えば小さい頃から、私は他人に認めてもらおうとあがいていた。周りとのズレを感じていたから、何よりも普通を求め続け彷徨っていた。自分に自信がないから、他人からの評価に一喜一憂した。流れる水のような己を全て受け入れてくれる容器を欲した。もうそんな人生は送りたくない。裏庭を枯らしたくない。そこには広大なエネルギーがある。生き生きとした力だ。なんとなく歩くのではなく、生命の躍動を表現しながら歩く。私はそんな生き方がしたい。私はそう考えを巡らして、目を開けた。

読書は成長する。そう読者と共に。私はまた『裏庭』を読むときがくるだろう。だから『裏庭』よ、またいつの日か。

体験書籍

『裏庭』 梨木香歩著

第三十三回全国高校生読書体験記コンクール

【一ツ橋文芸教育振興会賞】

マイタイム・ブレス・イン・デイス・モーメント

熊本県 九州学院高等学校 二年

徳 永 彩 葉

雨が降っている日、道路で跳ね返った水を吸収した靴下で重くなった足を急ぎ足で動かしているうちに、バケツをひっくり返したような雨が降ってきて、もうどうでもよくなって、大きな水たまりの中に自ら足をつっこんでしまう。自分の中のこんな感覚の中でアザミは生きているのだろうか。だからだろうか、スタジオの中で一人、ギター片手にわめき散らす彼女が、進路について考えるより音楽について考えることの方が大事だと豪語する彼女が、人と同じことが何も出来ない事を認めてしまっている彼女が、私よりもずっとずっと輝いてみえたのは。

アザミが輝いてみえるように、私には同世代の女の子達がとても輝いてみえる。同世代の女の子達に憧れという感情を持ったのは、高校に入ってからだった。それまでも他人を羨ましいと思ったことは何度もあったが、高校に入ってからその回数が以前の何倍にも増して増えた。好きな人の話をしている友達を見ている時、部活のバッグを抱えている子を見る時、この子達

は今この時間を生きていて、自分は少しそこからはずれた時間を生きているのではないかと思えて、今この時間を生きている子達が羨ましいと思う。二年生になると将来についてや行きたい大学について聞かれることが増えて、そんな時間の流れの中で私の進路も自然と決まった。進路が決まると目標も決まって、それに向けて勉強する時間も当然増えた。今しかできないことよりも、今しなければならぬことで私は手一杯になっている。その中をぐるぐる回りながら進んでいる。結果がでるのならまだ良いだろう。だが私の生きている世界はそんなに単純じゃなくて、努力⇨結果とならないことを私はもう学習してしまっている。たとえば、いつも以上にがんばった期末テストの結果がいつも以上に悪かった時、すべてを否定されたような気分になって一度立ち止まる。そのうち何か大切なことを落とししてきた気がして後ろに戻る、そんなことをしているうちにまた新しいテストが始まる。次があるならまだ良い。でもそのテストが自分の高校生活のすべてを懸けたものだったのなら、私は後ろに戻ることさえも出来ない。そんな時私が羨ましいと感じた彼女達には残るのだ。一生懸命人を好きになった思い出が、クラブ活動の仲間と泣いたり喜んだりした思い出が。今しかない時間を進んでいたという印が残るのだ。

中学校の時、クラブ活動をやっていた私は、どうしてあんなにがんばれたのだろうか。朝早く起きて練習をして、学校が終

わるとすぐに着替えて遅くまでまた練習をして、それでもそんなに大した結果なんてでていなかったのに。それでもがむしゃらに追いかけていたのだ。届くか届かないか、終わるか終わらないか、そんなわけもわからないし見えもしない物を、仲間達と追いかけていたのだ。逆に見えもしないものだったから追いかけていられたのかもしれない。今の私は遠くのをめざして走っていて、足元が見えないからふらついて立ち止まってしまふ。今年の夏休みは特に立ち止まってしまっている。夏休みはいつともより時間があるから苦手な教科を勉強しようと思つてから課外から帰る道のりの途中で地面がぐにやりと歪んで見えて必ず一度は自転車から降りてしまう。家で勉強している間にも、私はただ努力しているつもりになっているだけなんじゃないだろうか、これも全部否定されてしまうんじゃないかというような考えが頭の中でぐるぐる回って、シャープペンを放り投げてしまったりする。そして気付いたらこの本の同じページを開いている。「自分自身の資質から、世間の多くの人が達成しているようないろいろを自分はこなすことができないだろうともわかりかけていたが、不満はなかった。」というアザミの気持ちを書かれた文を何度も読み返すのだ。それは人と同じところに立とうと走る私をどんな言葉よりも助けてくれる言葉だった。

そんな時だった、私と同じように中学の頃部活ばかりやって

いた子達と話が盛り上がって、練習がきつかったこと、クラブ活動の仲間とうまくいかなかった時期があつたこと、中体連で負けてくやしかったこと。そんなことを話しているうちに、私は部活に楽しさばかり感じていたわけではなかった事を思い出した。今と同じように苦しかった事の方が多かった。それでも振り返ってみればそんな一日一日が愛しくて輝いていた。

水のはった田んぼ沿いの道は、私の帰り道だ。その日の田んぼには片翼の形をしたオレンジ色の雲が映しだされていた。あまりに綺麗で思わず空を見上げた時、初めて本物の翼が見えをおされるように、進む、進む、私にもアザミのように立ち止まり、振り返り、自分の声で叫べる力があるのだ。だから私は心の中で叫ぶ、今しかないこの一瞬よ、輝け、輝け。

体験書籍

『ミュージック・プレス・ユー!!』津村記久子著

選考委員による選評

人、それぞれ「創造の書」と出会う

辻原 登

私たち現生人類が東アフリカの一角に登場しておよそ十五万年がたった。その時間の中で、私たちが何を獲得し、何を失ったかと考えると面白い。十五万年前、私たち哺乳類の骨格の進化と脳の重さは限界に達した。つまりこの時点で進化は終わった。あるいは神の、自然による創造は終わった。このあと私たちは手に道具を持ち、道具の先に見えない道具を持った。言語である。この瞬間から私たちは、「まるで発射台を離れたロケットのように広大な言語空間へと放たれた」（三浦雅士）。自由を獲得したと言っているだろう。

佐藤咲良さんの「非存在的存在への希求」は、『新版 北海道の花』という花図鑑をもとに、人類に流れた十五万年間を佐藤さん一身に流れた時間にまで縮めて、それをみごとに言語化してみせた。一冊の「創造の書」に出会った喜びが正確に論理的に記述されている。しかし、「漠然と世界を眺め」（文中）る

幼児の喜びは失われて、戻って来ない。

菱刈智也君の「『家族』とともに歩む道」は、

「僕には父がいない。（略）なぜ父がいないのかは、母から聞かされていないし、自分から聞くこともできない」

という文章に象徴されるように、読み手の心に真つすぐ、痛切に届く。父親がいない、という事実を受け入れ、父親捜しなどという無駄な努力を止めて、母親との契りをしっかりと固めることで、新しい家族像を創造してゆこうとする清々しい力にみちた体験記だ。

マックローリー花ナンシーさんの「馬路村から学ぶこと」は、村おこし体験記を読むことと自分たちのまちおこしの体験をパラレルに記述しながら、経験を深化、進化させてゆく過程が平易な文章でレポートされていて好感を持った。それにしても、作者の名前の何と素敵なことか！

太田古都さんの「バーリントンのアン」ほど夢想と現実の幸福な出会いを綴った文章は珍らしい。プリンスエドワードアイランド大学へ進学して、本物のアンと出会えますように、と祈る。

緑川秀太君「富士山を汚すのは誰か」、吉川綾乃さん「何のために学ぶのか」、武藤春香さん「成長する庭」には、読書体験と実体験の幸運な共同とアンサンブルがあった。

徳永彩葉さん「マイタイム・プレス・イン・デイス・メモメント」。徳永さんの文章には独特の味わいがある。読んでいて、

心地よさと痛切さを同時に味わえるのだ。天性のものだろうか。

夏休みはいつもより時間があるから苦手な教科を勉強しようと決めてから課外から帰る道のりの途中で地面がぐにやりと歪んで見えて必ず一度は自転車から降りてしまう。

水のはった田んぼ沿いの道は、私の帰り道だ。その日の田んぼには片翼の形をしたオレンジ色の雲が映し出されていた。

たぶん津村記久子は高校生のとき、これと同じような感性と言葉を持っていた。作者の文体を自分のものにする能力。文才と呼ばれるものだ。

遠い本、近い本

穂村 弘

「非存在的存在への希求」に強く惹かれた。仮におなじくらい魅力的な文章があつたとしても、こちらを選んだと思う。ポイントは対象とした本のユニークさだ。読書体験記の対象書籍には、感情移入のしやすさと書きやすさから、主人公の境遇や体験が自分自身のそれに近い小説などが選ばれることが多い。ところが、作者が選んだ本は『新版 北海道の花』である。これには意表を衝かれた。花の図鑑からいったいどんな読書体験が語られるのかと興味をそそられたが、期待以上にユニークな世界が展開されていた。「黄色い花」 Ⅱ 「エゾノリュウキンカ」 Ⅱ 「蝦夷立金花」 Ⅱ 「ヤチブキ」 Ⅱ 「谷地路」。或る花の名前をきっかけとして、言葉と世界について次々に思いを巡らせた思考は小さな哲学といってもいいと思う。それは自分にとっての世界を豊かにすると同時に、目の前の現実そのものを更新する可能性を秘めている。それまでの自分から遠い本とは、遠い世界に繋がる扉なのかもしれない。

対照的なスタイルの「馬路村から学ぶこと」も、また別の意味で高校生離れした文章だった。自らが取り組んでいる地元商

店街の活性化と『ごっくん馬路村』の村おこし』を具体的に比較する形で進められる記述には引き込まれた。問題点の炙り出しと検討に説得力がある。ここにあるのは読書体験記のための読書というような受け身の行為ではない。作者にとって、今回の読書はそれ以前から取り組んでいる行為の自然な延長線上にある。そのことが体験記を書くに当たって作者に優れた目と手を与えたのだろう。

『家族』って何だろう」という一文からはじまる『家族』とともに歩む道」からは、作者の思いが真つ直ぐに伝わってくる。単に素直なだけでは言葉に思いを込めることはできない。作者の芯にある強さが、小説に描かれた世界を豊かに受け取らせ、同時に思いの言語化にも力を与えているようだ。「僕は父の記憶がひとつもない。父について一切聞いていない。けれども僕はもう母にこのことを聞かないことに決めている」という言葉に胸をうたれる。

「マイタイム・ブレス・イン・デイス・モーメント」の生き生きとした文体にも惹かれた。「夏休みはいつもより時間があるから苦手な教科を勉強しよう」と決めてから課外から帰る道のりの途中で地面がぐにやりと歪んで見えて必ず一度は自転車から降りてしまう」などの描写にはどこか小説的な魅力がある。文体といえば「成長する庭」にも注目した。「ただ逃げたかっただけだろ、お前。それを正当化しただけだっただけだろ、私」とい

った言葉の切れ味とリズム感。くわえて暗示的なタイトルもよかった。「富士山を汚すのは誰か」では、一冊の本をきつかけにして動き出す好奇心と行動力の強さに感銘を受けた。不安や徒労感がこの文章の中では反転して輝いている。また「何のために学ぶのか」では「化学反応」という捉え方に新鮮さを感じた。把握の独創性が文章全体を生かしている。そして「バーリントンのアン」に描かれたエピソードには、頭の中の想像では決して生み出せない味わいがあつた。軍隊、一人家族、ランニング……、ホストファミリイという言葉からは予想できない展開に目が離せなくなった。

世界が立ち上がる

角田 光代

名前を知ること、その「もの」が存在する、と『非存在的存在への希求』の作者は書く。山に登り、ただ漠然と眺めていた花の名前を知り、その花が名を持った個体として作者の前に存在する。この文章は、世界が色を持ち、かたちを持ち、ありありと立体的に立ちあらわれるその瞬間をみごとにとらえ、描き出している。選んだ本が、小説や評論ではなく、図鑑、ということも興味深かった。

『家族』とともに歩む道』は非常に素直に書かれた作品で、その素直さに好感を持った。『とんび』という小説に自分自身を重ねることによって、ひとつの強い支えを得たことが、まっすぐに描かれている。小説の力を信じさせてくれる作品だった。『馬路村から学ぶこと』は、私には非常に驚きであり、また、たのしくもあった。作者は高校生にして、町おこしを実践している。実践書を体験書籍に選び、自分たちの活動を反省し、今後を考えている。ほかの多くの読書体験記が、精神的な正義や正論に偏ってしまうのに反し、この作者は、読書を行動・実践にまっすぐつなげている。そのことがすがすがしかった。作

者の活動も応援したくなる。

留学先で、赤毛のアンと自分を重ねる『バーリントンのアン』の作者は、読むことで、ひとりのたいせつな友人を得た。そのことが生き生きと描かれている。この友だちは、この先もずっと彼女のそばにいて、ともに年齢を重ねていく。読んでいて、私も読書によってこんなふうな友だちの多くを得てきたことを思いだした。

『富士山を汚すのは誰か』は、野口健氏の著作を読み、山頂からの景色や日の出を見に、ではなく、ごみを見るために富士山に登る。私はまずそのことに衝撃を受けた。しかしそのごみを見るための登山が、作者に確固たる自信を与えることになった。経験としては、登山なのだが、しかしそもそも、ごみ、からはじまって、作者の世界が開いていくのが、意外で、おもしろかった。

なぜ勉強するのだろうか？『何のために学ぶのか』に書かれた問いは、多くの中学生高校生が考えることだろう。私も学生のころはずっと考えていて、そして答えが見つけれなかった。けれどこの作者は、読書をとおしてその答えを見つけた。答えを得たときの、発見のきらめきがこの文章にはある。答えが見つけれず、だから勉強しなかった高校生のころの自分に、この体験記を読ませてあげたいと本気で思った。

小学生のころから幾度も読み返している本を、高校三年生の

今も読み返すと書く『成長する庭』。自分の年齢によって、本の中身が変わってくる。実際は何ひとつ変わるはずはないのだが、でも、確実に前に読んだものとは異なる。そのことを作者は実感し、さらに、「小説の中に正解はない」という見解まで進んでいく。無意識のうちに、小説にただしさや答えをさがす人が多いなか、この気づきはとてみたいせつで大きなことだと思ふ。

『マイタイム・ブレス・イン・デイス・モーメント』の作者は文章が非常に独特で心に残った。水をはった田んぼの描写は、まるで小説のようでみごとだ。読んだ小説が、そのままこの作者の身となって、生き生きと根づいていることが、この文章から感じ取れる。個人的な感想だけれど、この作者には、今後、読書体験記や学校で出される宿題ではない文章を、書いていてほしいと思った。

文部科学大臣奨励賞の『非存在的存在への希求』にはじまり、ほかの入賞作どれも、それぞれのちいさな自分の世界を、自在に大きく広げていく様の感じ取れる体験記が多く、読んでいて心地よかった。

画一的ではない読み

文部科学省初等中等教育局主任視学官

西辻 正副

本や文章の読み方は画一的ではなく、何を目的として読んでいくのかによって様々な姿を見せる。今回、栄えある賞を受けた作品からは、目的に応じて、どのように本や文章と付き合っていけばよいか、それを自ら悟り、自らのものとしている、書き手の姿がよく見えてきた。

文部科学大臣奨励賞を受賞された、佐藤咲良さんの「非存在的存在への希求」の体験書籍は、図鑑の『新版 北海道の花』である。「読書」というと、文章を主とした本を読むことをイメージしがちなように思う。それは、人間の言葉の意識、ここでは「読書」という言葉に係る意識が、類型的なものの見方、世界を作り出してしまっているからなのだろう。佐藤さんの体験記は、まず、その面での世界を広げてくれる。そして、佐藤さん自身が登山で見付けた花の名前を、図鑑で調べることを通して、自らの「世界」を広げている。さらに、「名前をつける(覚える)」ことから、哲学的な思索へと高めている。

「名前」は、ある対象を指し示している。その「名前」、つま

り言葉を介して、先人はいろいろなものの見方、感じ方、考え方を展開してきた。しかし、その思索は、し尽くされてしまっているわけではない。佐藤さんは、先人の思索を追体験しながら、まだ知られていない、考えられていない領域へと歩みを進めつつあるようだ。それを文章に表すことで、佐藤さん自身もまだ分かっていない、ものの見方、感じ方を創り出すきっかけとなっている。それがこの作品の深さとなっている。

全国高等学校長協会賞を受けられた、菱刈智也さんの『「家族」とともに歩む道』は、その題からも感じるとおり、家族の温かさにあふれるものであった。それは、菱刈さんが伝えたい内容だけから来るものではなく、体験書籍や自身の実体験を背景にした、素直な言葉や表現から読み手が感じる、作品の手ざわりというようなものからも来ているように思う。

同じく全国高等学校長協会賞を受けられた、マックローリー花ナンシーさんの『馬路村から学ぶこと』は、学校の部活動として取り組んだ「まちおこし」が、まず読み手を引き付ける。そして、体験書籍から学んだことの分析、実際の行動へのつながりが明快になることで、実践的かつ説得力のある作品となっている。学校におけるキャリア教育という視点からも、マックローリーさんの日々の学びの深まりを感じさせてくれた。

一ツ橋文芸教育振興会賞を受けられた、緑川秀太さんの「富士山を汚すのは誰か」は、同名の体験書籍を読んでの作品であ

る。盲学校に在籍する緑川さんが富士登山に挑み、読書の追体験、そして自らの新たな体験を基に、ゴミ問題について鋭く考察している。悪天候で富士山頂からの素晴らしい景色は見るこゝとができなかったものの、緑川さんは、自身の眼の中に、未来へ残す我が国の美しい国土を見ることができたのではないだろうか。

今回、受賞された皆さんの作品からは、人とのコミュニケーションやコラボレーションの大切さ、そして主体性、自主性なども強く感じる事ができた。これらのことを大切にし、これからの読書体験が、より豊かなものとなることを期待したい。

読書は、変化への誘い水

全国高等学校長協会

大池 公紀

読書という人間にのみ可能な（少し考えてみるとちよつと奇妙な）行為を通じて、人は変わります。今回の作品の中にも多くの変わる予感が読み取れました。読書は、人が変わる良いチャンスになっています。そんな皆さんの作品を若いって素敵だなと感じながら読み終わりました。

佐藤咲良さんの『非存在的存在への希求』は、「どんな山に登っても、楽しかったとかきれいだったとかという思い出は一切ない」こんな本音いっぱいスタートが度肝を抜きます。「つまらなかった。植物を見たってそれが何だろう」そんな想いが、名前を「知る」ことで激変します。平たい山が「無意根山」に変わった時から「面白さ」が感じられます。名前が分かるとそのものが存在し始め、そこに生命が宿り、そして世界が広がる。佐藤さんは「なぜ名前がわかるというだけで楽しい」のかの理由探しに出発します。一つの世界が拡がりを持ち、更に知ること、またその先の世界にまで歩みが進みます。

とうとう佐藤さんは、「何も知らずに死んでいくのはもった

いない。（だから、）」と決意が固まります。もうここまで来ると後退はできません。更に前へ進みます。この文章の肝は、佐藤さんが大きく変わってゆく、そのダイナミズムを感じられることです。僕は、そこに力を感じました。

菱刈智也くんの『「家族」とともに歩む道』は、今回読んだ作品の中で最も素直な文章でした。その点の評価は、高かったです。飾ることなく、難しい文言や修辭もない温かい文章です。「秘すれば、花」でちよつとだけ背伸びしましたが、これもご愛敬です。「家族って何だろう」の投げかけから自分を見つめ直します。「知らず知らずのうちにふたをしてしまった」心のタブーを、開けてくれたのが、読書という行為でした。

少年野球をしていた頃には「父さんがほしい」と叫びたかったでしょう。でも、でも、言えなかった菱刈くんの思いは重い。僕は、もしこの作品が賞を取ってしまうと、また「父さん」の存在を思いだしてしまつて、かえって申し訳ないなあつて心配しています。「この夏、一冊の本が僕の背中を押した」そう、読書は時に喜びをいや増してくれたり、時に悲しみを乗り越えさせてくれる力があります。この作品には、変わっていく予感がたくさんします。その予感こそが、この作品を押した理由です。人は一つのところに留まることは出来ません。若ければなおさらです。菱刈くんが、この体験を書いた頃と、今は、きつと大きく変化していることでしょう。その期待で心が温かく

なれる作品です。

マックローリー 花ナンシーさんの『馬路村から学ぶこと』は、読書が実践に繋がりました。この作品は『ごっくん馬路村』の村おこし』一冊から地域の活性化に悩みながらも懸命になつて取り組む実践家の作品です。作品を読みながら、僕にはお野菜戦士「べじたぶるふぁーむ」のパフォーマンスが目に見えてくるようでした。いいえ、確かに見えました。地域社会のため様々な取り組み、そこには良い話ばかりではきつとなかったでしょう。活動には、当然晴れの日もあれば、どしゃ降りの日も、辛かった日々もあったでしょう。でも、マックローリーさんたちは「自分たちだってできるものがある」と何かを掴んだ予感を僕たち読み手に感じさせます。実践家の強さです。そして書き手は「自分の体験やこの本を読んだことで、卒業後も地域活性化に関わりたいたいと考えるようになった」と、ここにも変わっていく予感がたつぷりあります。

読書は、自らの在り方を少し変えてくれる、一歩前にでる勇氣を後ろから一寸だけ押してくれる、人間にしかできない行為です。是非、そんな読書を楽しみましょう。

＊第三十三回全国高校生読書体験記コンクール全入賞者一覧＊

【文部科学大臣奨励賞】 一編

北海道	道立	札幌南高等学校	一年	佐藤咲良	非存在的存在への希求
-----	----	---------	----	------	------------

【全国高等学校長協会賞】 二編

岐阜県	県立	岐阜北高等学校	一年	菱刈智也	「家族」とともに歩む道
高知県	県立	高知農業高等学校	三年	マックローリー 花ナンシー	馬路村から学ぶこと

【一ツ橋文芸教育振興会賞】 五編

岩手県	県立	不来方高等学校	二年	太田古都	バーリントンのアン
福島県	県立	福島県立盲学校高等部	二年	緑川秀太	富士山を汚すのは誰か
群馬県	県立	前橋女子高等学校	三年	吉川綾乃	何のために学ぶのか
神奈川県	県立	光陵高等学校	三年	武藤春香	成長する庭
熊本県	私立	九州学院高等学校	二年	徳永彩葉	マイタイム・プレス・イン・デイス・モーメント

【優良賞】 三九編

青森県	県立	弘前中央高等学校	三年	小館亜弥子	十年後の「私」が笑えるように
宮城県	県立	仙台南高等学校	一年	濱田祐華	甘酸っぱい苺同盟
秋田県	私立	和洋女子高等学校	三年	今 歩美	目標に向かって
山形県	県立	山形西高等学校	二年	石垣沙知	自分の気持ち
茨城県	私立	水戸啓明高等学校	二年	石川美樹	私の恋人
栃木県	県立	栃木女子高等学校	一年	松沼瑞穂	聴覚障害と祖父
埼玉県	県立	坂戸西高等学校	三年	安藤 優	命輝かせて
千葉県	国立	筑波大学附属聴覚特別支援学校	一年	浅野豪志	証
東京都	私立	共栄学園高等学校	一年	奥山翔太朗	五本指の約束
山梨県	県立	韮崎高等学校	一年	古屋結依子	生者への賛歌
長野県	県立	須坂東高等学校	三年	関 莉香	私を変えた出逢い

新潟県	県立	高田北城高等学校	一年	石田 鑑	「発見」という名の神秘
富山県	県立	南砺福野高等学校	二年	長田 涼佑	生と死の境
石川県	県立	金沢泉丘高等学校	二年	木村 仁美	ツナグもの、繋がれるもの
福井県	県立	高志高等学校	三年	杉本和香奈	空席―誰かが足りない―を読んで、
静岡県	県立	掛川西高等学校	二年	大谷 真優	生きたい
愛知県	私立	淑徳高等学校	三年	近藤志寿乃	今日も私は恋をする
三重県	国立	鈴鹿工業高等専門学校	三年	北村 晃久	勉強より大事なこと
滋賀県	県立	安曇川高等学校	三年	石井 沙弥	祖父と共に生きること―私の頭の中の消しゴム―を読んで、
京都府	府立	桂高等学校	一年	杉元 梨花	一つの挑戦
大阪府	市立	大阪市立南高等学校	三年	木下 さき	差別や偏見をなくすために
兵庫県	県立	西宮甲山高等学校	二年	武田 菜生	自分なりに
奈良県	県立	高田高等学校	二年	脇山 遼	心を整える
和歌山県	私立	智辯学園和歌山高等学校	二年	中尾 舟	罪を背負って
鳥取県	県立	米子東高等学校	一年	鴨木 美雪	努力と才能
島根県	県立	松江南高等学校	二年	渡部 美咲希	失われた誰かの生は、何のためにあるのか
岡山県	県立	笠岡高等学校	一年	高田 雅之	支えてくれる友とゴールに
広島県	国立	広島大学附属高等学校	二年	今井 美穂	美しき画家の世界
山口県	国立	徳山工業高等専門学校	一年	沖 知葉	過去の私に伝えたいこと
徳島県	県立	徳島北高等学校	二年	藤田 佳花	今、コミュニケーションについて考える
香川県	県立	高松高等学校	二年	杉村 真子	いざ、生きめやも―片陰の道に寄せて―
愛媛県	県立	松山東高等学校	二年	白石 早世	砂の上の世界
福岡県	県立	明善高等学校	二年	前田 愛実	その時、私は
佐賀県	私立	弘学館高等学校	二年	大川 紗季	ロング・ロング・アゴー
長崎県	県立	長崎東高等学校	一年	西村 玲実	進んだ先に見えるものは
大分県	県立	大分上野丘高等学校	一年	佐原 由香	無限の可能性―明日へ向かって
宮崎県	県立	宮崎西高等学校	一年	宇佐 玲乃	「正しいパンツのたたみ方」を読んで
鹿児島県	県立	加治木高等学校	三年	伊集院 風紗	振動を聞く
沖縄県	県立	那覇国際高等学校	二年	仲田 若加菜	「提供」への決断

【入 選】

一八八編

北海道	道立	旭川東高等学校	二年	南 愛	十六歳の考え事
北海道	道立	旭川東高等学校	二年	門木律子	目に見えない世界
北海道	道立	旭川北高等学校	二年	堀江冬芽	ねこは燈
北海道	道立	室蘭清水丘高等学校	三年	野口由海	いつもと違う夏
青森県	県立	弘前中央高等学校	二年	本田莉奈	他人を守るか
青森県	県立	弘前中央高等学校	二年	成田偉心	私の目標
青森県	県立	弘前中央高等学校	二年	三浦千桜里	読書に見る「世界」
青森県	県立	青森中央高等学校	三年	太田風彩	ここが私の世界の中心
岩手県	県立	一関第一高等学校	二年	井上優里	道標
岩手県	私立	岩手女子高等学校	三年	川村咲枝	伝える、伝わる、感謝の言葉
岩手県	県立	花巻北高等学校	一年	浅沼春香	心の奥の曇りを晴らす
岩手県	県立	盛岡第三高等学校	二年	江刺美桜	生と死
宮城県	県立	佐沼高等学校	二年	佐々木 藍	「人間失格」を読んで
宮城県	県立	仙台二華高等学校	二年	押野望佳	働くことの真価
宮城県	県立	宮城野高等学校	一年	仲佐梨奈	夜と霧に震災を想う
宮城県	県立	宮城野高等学校	一年	佐藤奏海	私の座右の書
秋田県	私立	和洋女子高等学校	三年	川村彩友佳	笑顔でいることの大切さ
秋田県	私立	和洋女子高等学校	三年	山本菜摘	今が変わる一冊
秋田県	私立	和洋女子高等学校	一年	畠山真央	語り継いでゆくべきこと
秋田県	県立	十和田高等学校	二年	成田沙弥佳	仲間と挑戦する明日へ向かって
山形県	県立	山形西高等学校	一年	佐藤真子	生きる意味
山形県	県立	天童高等学校	三年	今野 月	知らなかった…
山形県	県立	霞城学園高等学校	三年	岸 英里香	「私の人生」
山形県	県立	新庄南高等学校	三年	佐藤 愛	自分の意志で
福島県	県立	安積高等学校	一年	酒井英知	宇宙から出張の報告を受けて
福島県	県立	磐城高等学校	一年	石井茉莉奈	今日という日を生きる意味
福島県	私立	いわき秀英高等学校	二年	山澤大樹	新めて知れたこと

福島県	県立	橘高等学校	一年	佐藤優里奈	夢を追いつける意味
茨城県	私立	水戸啓明高等学校	二年	鈴木英里佳	他人への見方
茨城県	私立	水戸啓明高等学校	一年	水越夕茉	水泳人生観の変化
茨城県	県立	水戸第一高等学校	二年	永井夏実	見つけた、自分の居場所
茨城県	県立	水戸第一高等学校	二年	渡部彩乃	ひかりごけ
栃木県	国立	小山工業高等専門学校	三年	黒川洋一	祖父と父と私
栃木県	国立	小山工業高等専門学校	三年	吉原栄理佳	一度しかない
栃木県	国立	小山工業高等専門学校	一年	武井慎治	絆 ひとりじゃない
栃木県	国立	小山工業高等専門学校	一年	大橋彩登	裏切りと正義
群馬県	県立	桐生女子高等学校	一年	神立空見子	神様からの贈り物
群馬県	私立	高崎健康福祉大学高崎高等学校	二年	黒岩樹希也	裁判官が日本を滅ぼすを読んで
群馬県	県立	高崎女子高等学校	一年	藤塚紫苑	最後の教え
群馬県	県立	渋川女子高等学校	二年	高橋由衣	主人公相馬野枝と私
埼玉県	県立	坂戸西高等学校	二年	吉野愛珠	明日もまた生きていこう
埼玉県	県立	坂戸西高等学校	一年	野中希実	私が学んだ「生きるということ」
埼玉県	私立	星野高等学校	三年	丸山智未	本当の友達は「きみ自身」
埼玉県	私立	星野高等学校	二年	笠原 梓	生きる
千葉県	国立	筑波大学附属聴覚特別支援学校高等部	三年	中谷朱里	幼かりし日々のきみを越えて
千葉県	国立	筑波大学附属聴覚特別支援学校高等部	三年	那須映里	選択権を奪われたオレンジ
千葉県	県立	千葉東高等学校	二年	中野千晃	からん、ころん
千葉県	県立	桜が丘特別支援学校高等部	二年	高田真世	乙武さんの人生
東京都	私立	麹町学園女子高等学校	二年	井上桃花	〃二度と繰り返さない〃という誓い
東京都	私立	麹町学園女子高等学校	二年	川上菜乃	日記に込められた想い
東京都	私立	工学院大学附属高等学校	一年	中村健登	夏の出来事
東京都	私立	東京農業大学第一高等学校	三年	加来結子	「DIVE!!」を読んで
神奈川県	県立	光陵高等学校	二年	泉 柚子香	白と黒の千羽鶴
神奈川県	私立	湘南白百合学園高等学校	一年	渡邊清子	未来を見つめる力
神奈川県	私立	湘南白百合学園高等学校	一年	諏訪美月	なぜ勉強するのか
神奈川県	私立	聖セシリア女子高等学校	二年	酒井佑衣	父への感謝―五文字の言葉―

山梨県	県立	甲府南高等学校	一年	長澤聡子	みんなに支えられて
山梨県	県立	都留高等学校	二年	武田 愛	伝える
山梨県	県立	都留高等学校	二年	高橋絵里花	私の人生のカルテ
山梨県	県立	都留高等学校	一年	藤本千治	未来をみつめてみると
長野県	私立	松本第一高等学校	二年	折橋花菜	明日の私を変える後悔
長野県	私立	松本第一高等学校	二年	山本爽可	自分を見つめて
長野県	私立	松本第一高等学校	二年	澤田竜馬	自己と他から見えてくる視野
長野県	県立	大町高等学校	二年	石井柚実	正しいってなんだろう
新潟県	県立	新潟高等学校	一年	山田詩音	道化として生きる中で
新潟県	県立	新潟高等学校	一年	井関彩乃	「お皿の外」の命たち
新潟県	県立	新潟高等学校	一年	佐竹海音	マネージャーについて考える
新潟県	私立	第一学院高等学校新潟キャンパス	一年	秋山祐衣	自分で守れ、ばかものよ
富山県	県立	富山南高等学校	一年	清水知晶	本から見つけた自分の可能性
富山県	県立	南砺福光高等学校	二年	松本葉奈	壁にぶつかって気付いたこと
富山県	県立	南砺福光高等学校	一年	松浦有里佳	私たちに出来ること
富山県	県立	南砺福光高等学校	一年	水口理穂	六十八年という月日を越えて
石川県	県立	野々市明倫高等学校	二年	楠 彩	人と人との結びつき―母の背中から学んだこと―
石川県	県立	金沢錦丘高等学校	二年	杉谷 紬	メッカの祈り
石川県	県立	金沢桜丘高等学校	二年	栖原梨乃	ドリフターズ・リスト
石川県	県立	金沢二水高等学校	一年	吉田颯季	「情報編集力」を武器にして
福井県	県立	金津高等学校	三年	村本志織	私の挑戦
福井県	県立	美方高等学校	一年	山東佑里子	この廊下の先に
福井県	県立	県立ろう学校高等部	三年	丸山彩香	「人として生きる」ということ
福井県	県立	武生東高等学校	三年	魚見有沙	自分を見失った私
岐阜県	県立	岐阜北高等学校	一年	田中杏香	「生きる」を見つめる
岐阜県	県立	大垣商業高等学校	三年	安藤千帆	動物たちの声
岐阜県	県立	大垣商業高等学校	一年	名和未沙稀	生き方
岐阜県	県立	関高等学校	一年	大竹杏奈	あの世の知り合いの大切な「もの」
静岡県	県立	榛原高等学校	三年	柏原隆佑	渡米からの十二年間

静岡県	市立	浜松市立高等学校	三年	田中ユリ	本の魔術
静岡県	私立	静岡雙葉高等学校	三年	平尾朱希	煌めきに魅せられて
静岡県	県立	富士東高等学校	二年	高田有美	自分の人生に意味を持たせるということ
愛知県	県立	一宮西高等学校	二年	秋山歌澄	普通の幸せ
愛知県	私立	桜丘高等学校	三年	杉田佳凜	NHKが教えてくれたこと
愛知県	私立	椀山女学園高等学校	一年	平澤愛梨	自分に誇りを持つて
愛知県	県立	豊田西高等学校	一年	角田一成	赦せるか
三重県	国立	鈴鹿工業高等専門学校	二年	前田宙輝	十七歳
三重県	私立	暁高等学校	二年	山田陽奈乃	コスモス
三重県	私立	セントヨゼフ女子学園高等学校	一年	大谷夏帆	夢をかなえるために
三重県	県立	名張西高等学校	一年	渡辺明希	女性として生きるということ
滋賀県	県立	長浜北高等学校	二年	阪東響子	弱きを助け、強きをくじく
滋賀県	県立	高島高等学校	二年	土守将史	気持ちと考え方では人生は変わる
滋賀県	県立	玉川高等学校	二年	竹市 薫	母「オモニ」を読んで考えたこと
滋賀県	県立	東大津高等学校	一年	松村泉美	私の瞳に映る戦争
京都府	私立	立命館高等学校	三年	平松直也	変わった「留学」
京都府	私立	京都女子高等学校	三年	石山真子	プレゼント
京都府	私立	京都女子高等学校	二年	小川夏十星	トマトと蛭
京都府	府立	嵯峨野高等学校	二年	西山ほか	自由とは：
大阪府	府立	天王寺高等学校	二年	片岡ののこ	忘れてはならないこと
大阪府	市立	大阪市立汎愛高等学校	二年	米田拓也	神様のカルテを読んで
大阪府	府立	河南高等学校	三年	三家本将人	様々な気持ちに気づく
大阪府	府立	河南高等学校	二年	松本優希	変化と目標
兵庫県	県立	姫路西高等学校	二年	武地伶奈	ゼロから。——シャトルと笑顔と——
兵庫県	県立	加古川東高等学校	一年	岡本冴也香	私のメシアン
兵庫県	県立	日高高等学校	一年	奥仲麻衣	立ち止まらずに
兵庫県	私立	三木学園白陵高等学校	二年	玉田菜那	運命との対峙
奈良県	県立	橿原高等学校	二年	岸井勇人	「強く」走る
奈良県	県立	橿原高等学校	二年	高島逸花	「普通」と「特別」

奈良県	県立	畝傍高等学校	二年	楠本きさら	自分らしく駆け抜けよう
奈良県	私立	天理高等学校	二年	加藤なるみ	心の成長
和歌山県	私立	智辯学園和歌山高等学校	二年	知野紗友美	人生の転機
和歌山県	私立	智辯学園和歌山高等学校	二年	進藤善也	感覚と思考
和歌山県	私立	智辯学園和歌山高等学校	一年	塩見 茜	アラスカを追いかけて
和歌山県	私立	智辯学園和歌山高等学校	一年	向竹ひかる	0の輝き／戦争を知ること
鳥取県	私立	米子北斗高等学校	一年	山崎葉々子	地域の思いやり
鳥取県	県立	境港総合技術高等学校	一年	富永萌香	床に落ちたポップコーン食べられますか？
鳥取県	県立	鳥取東高等学校	一年	鈴木 遥	戦争を語り継ぐために
鳥取県	県立	鳥取中央育英高等学校	三年	伊賀清正	教室の陰
鳥根県	県立	隠岐島前高等学校	二年	古川 森	「自分」をもつ為に。
鳥根県	県立	横田高等学校	一年	糸原裕佳	「諦める」こと「選ぶ」こと
鳥根県	県立	益田高等学校	一年	奥田翔真	僕の置かれた場所
鳥根県	県立	松江北高等学校	二年	廣野亜未	利己主義が生んだ優しさ
岡山県	県立	倉敷南高等学校	一年	新山博紀	自分らしく
岡山県	県立	倉敷天城高等学校	一年	榎尾果歩	真っ直ぐ理想を追って
岡山県	県立	玉野光南高等学校	一年	人見英利香	ストロベリーナイトが私に教えてくれたこと
岡山県	私立	清心女子高等学校	三年	植木彩香	飾らない自分で
広島県	県立	安古市高等学校	二年	引地祐太	「風が強く吹いている」を読んで
広島県	市立	広島市立美鈴が丘高等学校	二年	嵐 光希	「文化委員長」と呼ばれて
広島県	私立	進徳女子高等学校	三年	大谷花菜	主人公から見える女性像
広島県	市立	広島市立沼田高等学校	一年	河野桃代	今の私から未来の自分へ／私の決意
山口県	県立	熊毛南高等学校	二年	今村瑞季	「検閲」のない社会とは。
山口県	県立	熊毛南高等学校	一年	森本真実	私のやる気スイッチを探して
山口県	県立	豊北高等学校	二年	春瀬花映	本当の友だち
山口県	私立	サビエル高等学校	二年	小林杏花	かそけき調べ
徳島県	県立	徳島北高等学校	一年	山戸映里佳	「死」の意味
徳島県	私立	徳島文理高等学校	一年	姫野二ナ	旅
徳島県	県立	富岡西高等学校	二年	野元美鈴	旅を夢見て

徳島県	県立	名西高等学校	一年	三浦綾乃	ベストパートナー
香川県	県立	丸亀高等学校	二年	石川遥香	未来への一步
香川県	県立	丸亀高等学校	二年	中山尚美	生き延びる―あの時代から学んだこと―
香川県	県立	丸亀高等学校	一年	篠原 萌	私の「幕が上がる」
香川県	市立	高松第一高等学校	一年	高嶋佑季	そうじの魔法にかけられて
愛媛県	県立	新居浜東高等学校	一年	白石桃菜	数字と言葉と私
愛媛県	県立	大洲高等学校	一年	谷岡 茜	「行ってきます」から「ただいま」へ
愛媛県	県立	松山南高等学校	二年	相原友紀	街を恋う人
愛媛県	県立	松山南高等学校	一年	光田千華	青春を生きる
高知県	県立	高知農業高等学校	三年	大北成美	経験、体験を大事に
高知県	県立	高知若草養護学校高等部	一年	西原奈緒子	戦争を考えるきっかけ
高知県	私立	高知学芸高等学校	二年	川村朱音	ありふれた宝物
高知県	私立	高知学芸高等学校	二年	岡村大夢	夢のための一步
福岡県	県立	門司大翔館高等学校	二年	若松由美花	色とりどりの絵の具
福岡県	県立	修猷館高等学校	二年	関口佳那	意志を持って服を着るということ
福岡県	県立	筑紫丘高等学校	二年	原田 怜	鴨川で「ホルモオオッ」と叫びたい!!
福岡県	県立	香住丘高等学校	一年	松本拓哉	読書を好きになるということ
佐賀県	私立	弘学館高等学校	二年	五箇野美香	見えない両手につつまれて
佐賀県	私立	弘学館高等学校	二年	野口玲奈	人を笑顔にするために
佐賀県	県立	致遠館高等学校	二年	福井みのり	「人間らしい」母親の姿
佐賀県	私立	佐賀学園高等学校	一年	山口絵実里	踏み出す一步
長崎県	県立	佐世保北高等学校	一年	沖島華子	スピリット・オブ・サムライ
長崎県	県立	長崎南高等学校	二年	秦 南美	健聴者と難聴者
長崎県	県立	対馬高等学校	二年	大部愛加	温かい家族
長崎県	県立	佐世保西高等学校	二年	池上麻由	愛
熊本県	私立	熊本信愛女学院高等学校	二年	小糸咲月	欲望のブレイキ
熊本県	県立	玉名高等学校	一年	本村奏恵	夢
熊本県	県立	阿蘇中央高等学校	二年	井野早耶香	繋がる命
熊本県	県立	阿蘇中央高等学校	二年	森本由依佳	出会いなおし

大分県	県立	日田高等学校	二年	伊東花乃	前を向いて生きる
大分県	私立	昭和学习園高等学校	二年	間柴妃南	海と毒薬
大分県	県立	大分豊府高等学校	一年	岡田悠花	百年一閃く殉死と自死の根底に流れるものゝ
大分県	県立	別府羽室台高等学校	三年	今里美紀	今だから言える祖父への「大好き」
宮崎県	県立	延岡高等学校	二年	古木麻優	反逆の長い旅
宮崎県	県立	宮崎大宮高等学校	二年	村社洋樹	フランクフル「夜と霧」が教えてくれるもの
宮崎県	私立	宮崎学園高等学校	一年	大久保愛日	少女、大志を抱く
宮崎県	私立	聖心ウルスラ学園高等学校	一年	鴨田美萌	産んでくれてありがとう
鹿児島県	県立	枕崎高等学校	二年	鮎川さくら	剣道少女
鹿児島県	県立	鶴丸高等学校	三年	向井伸歩	熱が騒ぐもの
鹿児島県	県立	鶴丸高等学校	二年	福元里佳	きみの友だち
鹿児島県	県立	鶴丸高等学校	一年	牟田佑太郎	意見を持つ
沖縄県	県立	那覇国際高等学校	三年	島袋健太郎	強い走りでもまだ見ぬ境地
沖縄県	県立	開邦高等学校	二年	川田桜子	その日がくるまで
沖縄県	県立	首里高等学校	三年	徳門あいみ	語りかける世界
沖縄県	県立	首里高等学校	二年	伊良波賢弥	字誌と祭りと私

(敬称略)

上位中央入賞者八名の読書体験記、及び優良賞・入選作のお名前、
高等学校名は、左記の『一ツ橋文芸教育振興会の読書推進活動』ホー
ムページに紹介されます(2月上旬予定)。
<http://www.hitotsubashi-bks.jp/dokusho/>

表紙撮影・五十嵐和博
表紙デザイン・中島慶章